

した。寒い時でしたので山の下から手提げ火鉢を持ってきて腰を卸して温まったものですから、いつのまにか眠ってしまった。それを曹長殿に見つけられ、衛兵司令と二人がシツカリ油を絞られたことを想い出します。疲れている時は絶対に腰を卸してはいけないとやかましく言われていたんですがね。

又、こんな事もありました。歩哨に立ったんですが、其の日は絶好の天気だったもので腹這いになって銃を据えて敵を監視しているうちに眠ってしまった。幸い誰も気付かれぬうちに眼を覚ましたので助かりました。ホッと胸を撫でおろしました。

十九年十月頃の話ですが醜陵（焼物で有名な景德鎮と並び称される焼物の名産地）にいた時に食糧調達のために占領地帯から少し離れた部落に入り、食糧を集めて馬に載せて運んだ後、私は山に登り敵状監視の任に着きました。暫らくすると下から飯盒一杯に油で炒めた焼飯を持ってきた。大変美味しく食べました。間もなく腹の具合が悪くなり、全部吐き出してしまった。そのうち便所へ何回も行きピーピーの猛烈な下痢で、フクランでいた

腹がペチャンコになってしまいました。

それでも当時二十五歳の若さがありましたから知らぬ顔で下へ降りたら、全員食当たりで寝込んでしまっているのに驚いて、よく調べたら桐油であったそうです。油を鑑定して調理した中国人も中毒症状で倒れていました。

## 不沈駆逐艦「楨」

石川県 松井喜一

昭和十八年一月、舞鶴海兵団へ入団して二月いっぱい新兵教育、三月三日横須賀海軍通信学校（今もそのまま残って自衛隊の陸軍通信学校になっている）入校、九月卒業。その後助手として十一月まで、次の六六期生の通信演習などに参加していました。私たち六五期生は三〇〇〇人ぐらいたそうですが、後に山口県防府に学校ができて、呉と佐世保鎮守府の者は転校しました。

十一月、転属命令がきて、第一雲洋丸（山下汽船からの徴用船を改造し、砲も整備された二〇〇〇〜三〇〇〇

屯ぐらい)勤務となり、いわゆる北方方面の哨戒で、艦船のような一〇〇屯ぐらいの船を二〇隻程度各地域に配置させ、敵が見えたら電信で「敵艦見ゆ」の報告をさせる洋上哨戒船の母艦なのです。

横浜が基地で司令部はメリケン波止場近くにあった。太平洋を真っ直ぐ東へゆき、北上し、カムチャッカの近くまで行くので、海はかなり荒れていました。母艦は二隻あったので、二船隊あって交替で勤務していたようです。

当時は米軍も南方で戦っていたので、あまり北洋にはこなかったので損害は少なかったのですが、艦は横須賀鎮守府所管に替わったので、私は古巣の舞鶴海兵団へ戻り、暫く予備隊にいました。

七月に駆逐艦「楨」(排水量二二〇〇屯、戦時急造型で、いわゆる「松型」駆逐艦という木偏のついた艦名のもの)が舞鶴工廠で艤装中でした。そこへまた転勤になり、「楨」に乗り組んで終戦までいました。

「楨」は八月に完成し、呉に回航して瀬戸内海で物凄く水雷訓練をやらされました。乗組員は駆逐艦で三五〇

人ぐらい乗っていたと思います。艦長は少佐で今も健在です。

「楨」の初陣は捷号作戦です。連合艦隊は十月十八日「捷一号作戦発動」を発令され、二十三日から二十六日まで、フィリピン沖海戦で連合艦隊は壊滅的打撃を受けました。小沢艦隊は米機動部隊誘致に成功したけれど、第一遊撃部隊主力(栗田艦隊)はレイテ湾突入を断念し好機を失いました。「楨」はその小沢艦隊に属していませんでした。

「楨」は十月二十三日か、そのころまでは瀬戸内海で訓練していた。その時、機動部隊・小沢艦隊が編成されたのです。戦艦は伊勢、日向の二隻、空母は瑞鶴、千代田、千代田、瑞鳳です。空母は商船改造だから千歳、千代田は飛行機五〇機ぐらいしか搭載していませんでした。

小沢艦隊は空母を真中にして、前後に戦艦、横には巡洋艦、その周囲を駆逐艦というようにして、「楨」は護衛駆逐艦でした。

軍艦は飛行機でやられた。艦隊は敵機動隊を誘導する作戦だったから、敵機動部隊のかすかな位置が見当つい

たので、駆逐艦五隻ぐらいで夜襲をかけたのだが見つからなくて戻ってきたのです。

二十五日の朝、八時ごろでしたか、敵艦載機グラマンがきた。航空戦だったから、またたく間だった。空母は四隻とも全部沈められました。

敵は一番最初に空母を狙ってくる。日本の空母は飛行機が発った後だったのです（ミッドウェー海戦もそうだった）。情報はそのころ電波探知機でとらえられていた。日本のは、まだそこまですってなかったたので米軍に先に見つけられた格好です。

その日、延べ何百機きたのですかね、朝から晩まで、次から次へと、ジャンジャンきた。私たちの艦が襲われたのは最後の方です。空母がみなやられて、それから大きな艦がやられるのだけれど、戦艦など強いもの、直撃受けてもぜんぜん沈まないし、悠々と走っている。

巡洋艦は一、二隻やられた。駆逐艦なんかは弱い。私たちの近くで秋月という駆逐艦が魚雷発射管にまともに直撃を受け、魚雷が誘爆したのでしょうか。真つ二つに割れて、グワーツと轟沈ですよ。もの凄いいました。

秋月の兵隊がみな浮いていて、私たち助けておった。でも助けておるけれど、ジャンジャン空襲を受けているのです。蛇航しながら助けていたが、敵艦はほとんど薄暗くなるまできた。敵は日が暮れてこなくなつて、ホツとしたという感じだったので。

とにかく、実際に子供のころ、日本海海戦の写真や、絵で見た凄いい高さの水柱が立っていたのと、一緒です。

こちらは高射砲や艦砲をジャンジャン射つのだし、向うが落とす爆弾の水柱、空は煙幕でなんというか色が変わっている。艦は轟沈である。何十層もの高い水柱が立つという本当の地獄絵だ。ただただ「凄いい」ものでした。

先ほど言いましたように、沈没した軍艦の兵隊は大体駆逐艦が助けている。艦は沈んでも浮いている兵隊は沢山いるので相当助けました。秋月の艦長なども助けました。助けましたも、まだジャンジャン戦闘しているわけです。艦の周囲では全部機関銃や機関砲を射っているのですから弾薬運びやらを助けられた兵隊が手伝っているのです。手伝いながら戦死した人もおりました。

敵艦は反復空襲してきます。浮いていても助けられた

者もいれば、助けきれない人もいる。艦を停止して助けることができないのですから。しかし、なんとか助けたい。水面から甲板まで高さが四、五呎ぐらいでしたか。ロープを投げ、つかまらせて引き上げる。だから負傷している人は無理でした。

夕方になる。まだ浮いている人がいるのだが、諦めておったのか、「もう帰ってくれ」と帽子を振っていた。轟沈した時巻き込まれた人もいたろうし、負傷してしばらくして沈んだ人もいたろう。浮かんでいる人も全部は助け切らなくて帰らなければならなかった。本当に辛かった。いまでも思い出します。

小沢中将は旗艦の空母が沈んだので、巡洋艦に移乗し、それが旗艦となり、各艦はテンデンバラバラになって奄美大島まで帰ってきたのです。艦はみな穴だらけになっているので、呉や佐世保に航行して修理しました。それで一応小沢艦隊は解散しました。

比島周辺では、前に申し上げましたフィリピン沖海戦後も海軍の艦艇はみなやられたけれども、レイテ島には陸軍がまだ沢山苦戦していました。そこで、隼鷹という

改造空母により物資、弾薬の補給をしたのです。その護衛を「楨」ともう一隻の駆逐艦がしたのです。そのころ、大船隊で動くのではないので飛行機はあまりきませんでした。敵潜水艦はウヨウヨしていました。駆逐艦は隼鷹の後先になりながら、水中探知機を使いながら潜水艦のスクリーナーの音を探知しては、爆雷を投げ込んだりしました。そのころになると、水測という兵隊がいました。駆逐艦本来の仕事は潜水艦の掃討でしたから、隼鷹の護衛任務は無事果たしました。

掃路、台湾を過ぎ翌日九州着というころ、敵潜水艦に襲われた。というのは隼鷹に射った魚雷を水測兵が見つけ「敵潜水艦魚雷」と報告し、艦長が直ちに舵を取ったのですが、魚雷は艦の軸先を突き抜け炸裂しなかったが、軸先は折れ、錨を下したまま引っ張って航行していたのです(夜間で気がつかなかった)。そのため長崎の三菱ドックに入り修理に二カ月を要しました。

二十年の正月は長崎でやったのだから、十九年十二月、呉へ回航して瀬戸内海にいたのですが、戦艦大和、巡洋艦矢矧と駆逐艦何隻かと一緒でした。そのころも南方で

戦艦、巡洋艦などほとんどやられ、残存艦隊は瀬戸内海に張り付けになっていました。

大和以下一〇隻が海上特別攻撃隊として、瀬戸内海、徳山港を出撃して南下したのは四月六日ということでした。

帝国海軍が座して滅びるより、沖縄島に乗り上げ、艦砲で上陸軍を阻止するという悲壮なもので、当時私たちに細かいことは分かりませんが、内心では生きて帰ることはできないと覚悟しておりました。

帰還できたものは「楨」をはじめ駆逐艦四隻だけでした。このように、艦船部隊へ行って生きて帰った者は珍しいのです。私たちの通信学校の同期生も約半分の一四〇〇人が死んでいます。いま生存会員で比叡山に慰霊碑を建立中です。これは我々にとっては大事業ですが、生きて帰った者のつとめであると思っております。

## 衡陽攻略戦は屍を越えて

三重県 萩原 祐

私は浙贛作戦の途中からで、芷江も初めからしまいで運の悪い男や、当時は騎兵だったが、浙贛作戦が終わって、昭和十八年五月編成改正になり、乙装備から甲装備編成になった。そうして第十三軍から支那派遣軍の戦闘主力の第十一軍隷下になったのです。

騎兵隊では馬が伝染病にかかり、精度のよい馬の補充がつかない（歩兵の連隊長の馬より、騎兵の一番悪い馬の方がいい馬）。それで第百十六師団の騎兵隊は解散、そこで私は出身県が三重県だから郷土部隊の歩兵第百三十三連隊へ行くことになった。

第百十六師団は四個連隊編成だったが、奈良の三十八連隊は十六師団（垣）へ抽出され、福知山、京都、久居（津）の三個連隊だけが残り、それに騎兵隊が一個小隊ずつ編入した。